彙　報

一九八七年一月より
一九八七年一二月まで

研究狀況

班研究

東方部

古史新證　　班長　林　巳奈夫

前年にひきつづき、中國新石器時代から秦漢時代までの、出土資料に關する諸問題について、班員の研究發表を、隔週でおこなっている。前回の「中國文明の諸源流」班をふくめて、當班で發表されたもののうち、いくつかを、『古史春秋』第四號として公刊した。

中國近世の法制と社會　　班長　梅原　郁

唐代に一つのピークに達した中國の法制は、いわゆる「律令制度」の名とともに日本でも多くの研究者が關心を寄せている。また、元代の法制は『元典章』や『通制條格』などを通して本研究所でも優れた研究成果をあげてきた。その中間にあり、しかも中國法制における注目すべきエポックである宋代の法制については、これまで必ずしも十分に究明されているとは言いにくい。本共同研究は、南宋の『慶元條法事類』と、最近その存在が知られるようになった明板『清明集』の會讀を通じて、律令時代から勅令時代への移行、地方末端で中央の勅令がどのように具體的に運用されていたか等の問題をさまざまな視角から追求する。現在、毎週、『條法事類』と『清明集』を交互に讀みながら、問題點を檢討しつつあわせて現代語譯と詳註を作成している。本年度は前者は卷第七、職制門四まで、後者は卷三賦役門まで讀み進んでいる。

古代中國の科學　　班長　山田　慶兒

一九八二年度から五年間にわたって進めてきた班研究「古代中國の科學」は、八七年三月で終了した。その間、『黃帝內經太素』の譯注の初稿を完成し、それと並行して仁和寺本『太素』の索引の初稿を作成した。研究報告は、できれば八八年度中に出版したいと考えている。また、索引の初稿は八七年度中に印刷に付し、楊上善の注を使って可能なかぎり破損・蟲食いなどで失われた本文の復元をおこない、定稿を仕上げて、いずれ出版する方針である。同時に進めてきた『開元占經』の會讀は六十九卷までを終了、本年度以後も全百三十卷を讀了するまで繼續する豫定である。

中國科學史文獻研究　　班長　山田　慶兒

一九八七年度から「中國科學史文獻研究」班を組織し、三か年にわたって、これまであまり取り上げてこなかった諸種の文獻の檢討を進めてゆく。とりあげる文獻は大きく二つに分かれる。一つは、最近出土した科學文獻のうち、『新發現中國科學史資料の研究・譯注篇』を公刊した時點以後に公表されたもの。その譯注は、前掲書の補遺として、『東方學報』に掲載してゆく豫定である。一つは、中國科學の個個の達成よりもむしろ、中國科學の方法・思想・組織、あるいは外國の知識の受容過程などがよくわかる、科學のすべての分野にわたる文獻。たとえば、『宋史』天文志に收める沈括の渾儀・浮漏・景表の三議は、たんに天文器械裝置の構造を論じているだけでなく、觀測論・觀測器械史としても出色の文章である。『新修本草』以下の本草書にみえる「序例」はいわば藥物學概論であり、中國科學における量的方法の意味をみごとに開示している。また『崇禎曆書』には西洋科學受容の過程と樣態が記錄されている。こうした文獻の檢討を通して、中國科學の特質をさまざまな側面から解明してゆきたい。會讀にとりあげた文獻は譯注を作って編集・出版し、また別に研究論文も順次『東方學報』に發表してゆきたいと考えている。なお、『開元占經』についても、とりあえず引用書目索引を作成する豫定である。

この期間中におこなわれた研究報告は左記の通りである。

四　月二八日　扁鵲傳說　　山田　慶兒
六　月三〇日　內觀から內丹へ―隋唐時代の養生法―　　坂出　祥伸
九　月二二日　日中醫學交流史の中の周岐來　　潘　吉星
一〇月　六　日　『傷寒論』の歷史　　赤掘　昭
一一月一七日　狐剛子・江淹と『周易參同契』　　坂出　祥伸
一二月　八　日　『醫心方』等の高血壓症の主治穴　　高島　文一
一二月一五日　康熙帝と西洋科學　　潘　吉星
　　中國化學史研究について　　潘　吉星

文人の生活　班長　荒井　健

一九八六年度より向う五年の豫定で、舊中國の文人の生活全般について、「江南文人の研究」班の成果をふまえ、精神的・物質的兩面から綜合的な檢討を行ってみようという目的で、本研究班を發足させる。舊江南文人班よりは一層廣範・包括的なテーマをあえて掲げたのは、班員おのおのの關心のありようからして、研究對象をむしろ限定しないほうをよしと考えたのである。研究の進めかたとしては、舊班と同じく、下記のとおり各分野の報告と並行して、十七世紀・明末の代表的な文人趣味文獻たる文震亨「長物志」の會讀を續ける。今期は卷六・七・九・十および五・十二（一部）を讀了した。

五月二二日　畑正高氏に聞く（香の實物と說明）
六月二六日　陽明文庫にて觀書
一〇月一六日　藤井有鄰館文物參觀
一一月二七日　一六世紀の日中貿易　脇田　晴子
一二月二五日　文人と隱逸（續）　茂木　信之

目錄學の諸問題　班長　尾崎雄二郎

今年度、「目錄學の諸問題」班の目錄班（A班）では、前年度に引續き黃丕烈『士禮居藏書題跋記』の會讀を進めた。擔當者は、池田秀三・西村富美子・新保敦子・李鋭清・愛甲弘志・宇佐美文理・井波陵一・島一・井上進の計九名であった。

一方、小學班（B班）の研究題目及びその發表者は次のようであった。

一九八七年
四月二七日　最近の中國における『說文解字』研究について　阿辻　哲次
五月一一日　『日本風土記』に見える明代吳語　赤松　祐子
五月二五日　コータン文書中の漢語語彙—音韻史的檢討—　高田　時雄
六月八日　書評：余廼永『上古音系研究』　林　武實
七月六日　黃侃名字解詁　淺原　達郎
九月二八日　『東音譜』「五十母字音釋」について　森　博達
一〇月一二日　現代中國語における「陰陽對轉」について　尾崎雄二郎
一〇月二六日　漢字前史試論　阿辻　哲次
一一月九日　上田正『慧琳反切總覽』について　矢放　昭文
一二月七日　『音韻逢源』の字音—現代北京語との比較—　岩田　憲幸

轉形期の中國　班長　竹内　實

現代中國の多角的な分析とその綜合をめざして、各班員の研究報告、討論を中心に研究會をつみかさね、三月末をもって終了した。この成果は論文集『轉形期の中國』としてまとめられ、近々刊行豫定である。なお、八七年一月より三月末までの研究會の狀況はつぎのとおりである。

一月一七日　周立波創作簡論　阿賴耶順宏
中國現代文學學會に參加して　吉田　富夫
一月三一日　中國農村社會經濟構造の變容　石田　浩
分析「模範」の宣傳と自主性　小島　朗之
二月二一日　舒婷《雙桅船》について　坂井東洋男
教育の近代化と教師養成教育　中島　勝住
二月二八日　アメリカにおける中國人留學生　楠原　俊代
盛世才の新疆支配と毛澤民の死　伊原吉之助
三月二八日　吳晗の死　小山　三郎
北京の春　山田　敬三
現代中國と孔子　河田　悌一
孫中山研究より見た「轉形期」の歷史學　狹間　直樹

國民革命の研究　狹間　直樹

本年も從前どおり、國民革命時期（前後の五四運動期と抗日戰爭を含む）の研究テーマにつき、各班員が研究發表をおこなった。なお、一月から六月にかけて研究所客員研究員として迎えた王學莊先生（中國社會科學院近代史研究所副研究員）は、研究班への參加・研究發表のほか、十回にわたる民國初年の文語體書簡文を材料とする講讀會を主宰された。本國研究者ならではの詳細かつ明確な史料講讀に、各班員大いに啓發をうけた（講讀會のうち、五月二二日と六月二六日は午前中に開催）。このほか、以下の中國の諸先生が、本研究班もしくは本研究班後援の研究會に參加され、先生方の研究の一端をうかがうことができた。

○姜義華先生（一月二三日　復旦大學歷史系教授・早稻田大學交換研究員）　本研究所訪問の機會に研究發表をお願いしたもの。

○王淇先生（九月七日　中共中央黨史研究室室務委員・教授）　中國中共黨史研究會訪日團の一員として、逢先知教授（中共中央文獻研究室副主任）・汪裕堯副教授（同研究室室務委員）と

ともに研究所來訪の際、本研究班に參加されたもの。

○陳錫祺先生（一一月一五日　中山大學歴史系教授）、張磊先生（廣東省社會科學院副院長・研究員）、方式光先生（同院孫中山研究所副所長・副研究員）　孫文研究會（代表山口一郎氏）が主催し、本研究班及び辛亥革命研究會が後援した孫文研究學術報告會で研究發表をされたもの。

一　月二三日　胡適與〝全盤西化論〟　姜　義華
二　月一三日　家族制度と民法改正　小野　和子
二　月二〇日　孫文の護法について　松尾　洋二
二　月二七日　民國初年文言書信選讀　王　學莊
三　月　六　日　康有爲と木戸孝允のポーランド分割に對する見解　メルヒョル
三　月一〇日　民國初年文言書信選讀　王　學莊
三　月一三日　民國初年文言書信選讀　王　學莊
三　月二五日　民國初年文言書信選讀　王　學莊
三　月二七日　民國初年文言書信選讀　王　學莊
四　月一七日　大革命時期的國民黨吳江縣黨部　王　學莊
四　月二四日　三大政策と黄埔軍校　狹間　直樹
五　月八　日　五四運動前後の上海勞働運動　江田　憲治
五　月一五日　民國初年文言書信選讀　王　學莊
五　月二二日　民國初年文言書信選讀　王　學莊
　　華西のマンチェスター　森　時彦
五　月二九日　民國初年文言書信選讀　王　學莊
六　月　五　日　勞工神聖の麵包　小野　信爾
六　月一二日　楊賢江の教育思想　中島　勝住
六　月一九日　民國初年文言書信選讀　王　學莊
六　月二六日　民國初年文言書信選讀　王　學莊
　　國民政府の民法制定について　中村　哲夫
九　月　七　日　關於〝三大政策〟口號的誕生　狹間　直樹
　　關於中國〝三大政策〟研究狀況的介紹　王　淇
九　月二五日　陝西省における國民軍と農民協會運動　菊池　一隆
一〇月　二　日　廖仲愷と第一次國共合作　北村　稔
一〇月　九　日　萌芽期の東北文學　村田　裕子
一〇月一六日　清末天津商會の構成内容と機能について　林原　文子
一〇月二三日　孫文と五四　松本　英紀
一〇月三〇日　國民革命時期の康有爲　竹内　弘行
一一月　六　日　農民の海豐農民運動　蒲　豐彦
一一月一五日　鄉村的宗族主義和海陸豐農民運動　蒲　豐彦
　　評孫中山祖籍問題的爭論　方　式光
　　開拓與奮進：孫中山的政治生涯的歴程　張　磊
　　孫文の「主義」觀について　山口一郎・野間和則
　　孫中山研究與中日友好　陳　錫祺
一一月二〇日　〝山西犧牲同盟會〟初探　萩野　脩二
一一月二七日　《安徽俗話報》について　河田　悌一
一二月　四　日　陝西省における水利建設をめぐって　川井　悟

六朝道教の研究　班長　吉川　忠夫

梁の道士陶弘景が編纂した『眞誥』七篇全二十卷の會讀を通して六朝道教の一端をうかがおうとする本研究班は、昨年度、斯書の解題的部分である卷十九・二十と、第一卷とを讀みおえている。本年度もまた、所の内外より二十名程の參加を得て、第二・三卷の譯註作業を繼續中である。

中國中世の文物　班長　礪波　護

近年、中國で陸續と發表される出土文物は、文獻史料に限界を感ずる多くの研究者の注目を集めている。同時代資料たる樣々な文物の研究は、正史の如き編纂史料を補い、あるいは訂正するだけでなく、未知の研究領域を開拓する糸口ともなり得る。本研究班は、中國の中世（ここでは大まかに秦漢代から唐宋に至る廣い時代を指す）の、傳世品を含む樣々な出土文物を紹介してその歴史的意義を檢討し、研究の視野を廣げていくことを目

的として、一九八六年四月より五年間の豫定で發足した。所の内外から三〇名近い班員の參加を得て、隔週水曜日に文物をテーマとする研究報告が行われている。

今年は以下の研究發表が行なわれた。

一月二一日　黄泉の國の土地賣買——漢魏六朝地券考　冨谷　至
二月四日　東漢時期の巫術道教資料　小南一郎
二月二五日　六朝後半期における道教の死生觀——墓との關連について　都築晶子
四月一五日　襄陽張氏墓誌研究　谷川道雄
五月六日　杭州六和塔四十二章經碑の周邊　赤松明彦
五月二〇日　西晉の賈皇后の乳母徐義の墓誌銘について　福原啓郎
六月三日　和林格爾漢墓壁畫に見える官衙と屬吏　佐原康夫
六月一七日　洛陽の唐代墓誌　中砂明徳
七月一日　唐代石刻官文書二種——賜盧正道勅と勅内莊宅使牒　礪波　護
九月一六日　敦煌莫高窟の山水表現について　河野道房
一〇月七日　道教の道系と禪の法統　吉川忠夫
一〇月二一日　式盤について　新井晉司
一一月一八日　梁王墓碑誌銘　中村圭爾
一二月二日　房山石經と雲居寺——近刊『房山石經題記彙編』を手がかりに　氣賀澤保規

四—八世紀の中央アジアとインド　班長　乗山正進

一九八六年四月より五年計畫で開始した研究班の目標（東方學報第五十九册、六〇四頁參照）のうち、『往五天竺國傳』の現代語譯と注釋との作成は、八七年一月より十二月までの期間に、西天竺國より謝飛國までの記事を終了した。擔當者は、林武實・赤松明彦・井狩彌介・森安孝夫・稲葉穆・杉山正明・乗山正進で、現代語譯及び語注と、内容注とを別人が擔當することによって、兩者の精度を増すことにつとめた。テキストは、ペリオ・羽田共編『敦煌遺書』上册分に基き、羽田亨「慧超往五天竺國傳逐錄」・W. Fuchs, Hui-ch'ao's Pilgerreise durch Nordwest-Indien und Zentral-Asien um 726 を參照している。

日本部

近代日本の政治運動　班長　古屋哲夫

この研究班は尊王攘夷運動から昭和初期の社會運動まで、近代日本の諸種の政治運動を比較研究することを目的としている。これらの政治運動が生起する條件には、政治體制の集權化、議會の制度化、政憲政治の進展、種々の社會集團の政治化などの政治構造の變化があるが、こうした變動によって生成・展開してくる政治運動を比較・檢討する觀點として、運動の組織、綱領の作成、財政基盤、組織指導のあり方等をとりあげ、政治運動に共通する特質をさぐり、同時に近代日本の政治そのものの特徴を追求する。

國民文化の成立：ナショナリズムの諸相　班長　飛鳥井雅道

本研究班も再び第二回の取りまとめの時期を迎え、各報告は明治二十年代から三十年代というナショナリズムの高揚を論點に收束してきた觀がある。報告書においては、内政と外交、政府與黨と野黨民黨、貴族院と衆議院、中央と地方、西歐文化と傳統文化などといった種々の對立・止揚としての文化狀況についての各論が出揃う豫定である。

一九世紀の文明史的研究　班長　横山俊夫

人類史において一九世紀とは何であったのか？この問いへの答えを、當時の情報傳播技術と諸文明の態樣との連關という視點からさぐっている。三年近い討論を經て明らかになってきたのは、一九世紀の樣々な人々が、眼に見えるもの・見えないものをめぐって際立ったこだわりを示す現象である。本年度末より、報告書『視覺の一九世紀（假題）』の編集作業を始める。

日本・東方・西洋各部からの所内班員に加え、本年はオックスフォード大學のB・パウエル博士、中國社會科學院の潘吉星教授が客員班員として參加した。

「滿州國」の研究　班長　山本有造

本研究會は、日本の植民地支配の主要な一環をなした「滿州」——中國東北地域について、その最終形態としての「滿州國」期に焦點をあて、支配の實態を統合的に（政治的・經濟的・文化的諸側面、ならびに日本植民地史的および中國地域史的アプローチを合せて）究明しようとする。一年間の準備會ののち、一九八七年四月より正式に發足し、現在隔週に研究會を開いている。

關西における關係研究者の數が限られているため、關東方面からゲスト・スピーカーを招くなど報告の幅を廣げるよう努力している。所内外の關心のある各位の參加を歡迎する。

西洋部

一八世紀ヨーロッパの空間認識

班長　樋口　謹一

一八世紀は、一七世紀までの閉じた世界から脱け出そうとする時代であると同時に、一九世紀からの歴史の時代ともまた違った様相をもつ時代である。本研究は、この時代の經驗した空間認識の大幅な擴大と變化を、自然的・社會的・シンボル的等のさまざまな側面においてあとづけ、それによってこの時代のエピステーメーを浮彫りにすることを目的とするものである。論文の執筆・檢討はすでに完了しており、それをまとめた研究報告『空間の世紀』が一九八八年三月に筑摩書房より刊行される豫定である。

諸宗教の比較論的研究　班長　山下　正男

本研究は、キリスト教、イスラム教、佛教、ヒンズー教、道教、神道、各種民間宗教を研究對象とする。研究方法は文獻學的方法とフィールド・ワーク的方法を併用する。

班員は前掲の諸宗教のうちの一つまたは二つの專門家であって、各人は研究會の場で、自己の分野の專門的知識を提供するとともに、他の分野の專門家と共同して比較研究に努める。その場合、各宗教のもつ重層性に留意する。重層性とは、神學レベル、儀禮レベル、民俗學的レベルからなる重層性を意味する。そして比較に際してはこの三つのレベルの混同を避けるように努める。

本研究の最終目標は、諸宗教の比較によって、宗教一般の歸納法的定義を見出すことにある。

國家の比較史的研究　班長　中村賢二郎

本研究は前近代社會における國家の諸機能を明らかにすることを目指している。ヨーロッパ中・近世國家を主對象としつつも、同時にヨーロッパ近代、日本・中國・西アジアとの比較をも行なっている。班員の問題關心もしだいに收斂され、王權の象徴的機能、そのイデオロギー的表現、國家の司法・行政・財政機構、民族・國民意識などが本年度の主たる考察對象であった。

民族誌記述の方法をめぐって　班長　谷　泰

初年度はおもに民族誌記述の方法、遡ってはそれを行なう際の前提作業としてのフィールドにおける意味の讀みとりに係わる最近の方法論上の議論や主張を批判的に紹介することに焦點をおいた。八六年度は、これらの作業の上に立って、個々の班員のフィールドおよび關心對象に應じて、具體的な民族誌的ケース・スタディの開陳がなされた。もちろん報告者に應じて、志向する記述の對象は異なったが、いくつかの點で班員間に合意が成立しつつある。

知識と秩序　――近代におけるその再編過程

班長　阪上　孝

フランス革命をはさんで一八世紀半から一八三〇年頃にいたる時期は、政治・經濟の領域のみならず知識の領域においても大きな革新が進行し、しかも、知識と社會の關係が大きく變化した時代である。社會秩序は神によって與えられたものではなく人間が作るものだという新たな前提のもとで、秩序の建設のための知識の形成、その知識の制度化・社會化が重要な課題となり、またそれにともなって社會における知識人集團の問題が現れてくるのである。本研究は、この時期の知識と秩序の關係を多角的に檢討することによって、近代社會の問題性をその原點において把握し、同時に、近く二百周年を迎えるフランス革命について、從來とはちがった角度から光を當てることを目的とするものである。目下、各分野の研究成果を持ち寄り、共通の枠組を作る作業を進めている。

フランス・ロマン主義の研究　班長　宇佐美　齊

本研究班は、以下の趣旨に基いて、一九八七年四月に活動を開始した。

フランス文學においてロマン主義が提起した問題とは何かを問うことから始める。その際、音樂、美術、演劇などの諸藝術との關わり、政治や社會の變動が及ぼした影響、思想史的なコンテクスト、および他のヨーロッパ諸國との比較對照の視點をも重視する。ついでそれらの諸問題がどのように煮つめられていったかを問う。特に十九世紀後半におけるロマン主義の展開、結實あるいは變貌までを見とどけたい。從って時代區分としては、十八世紀半ばから二十世紀初頭までを視野に收める。

なお研究期間は、一九九一年三月末までの四年間の豫定である。

傳統文化の構造　―古代インドとインド・ヨーロッパ諸民族の文化比較―　班長　井狩　彌介

本年四月より開始した本研究班では、表記の課題に關し、三年計畫でまず古代インドの傳統文化に焦點をあて、いわゆる「インド世界」を成立せしめているヒンドゥー教社會の複合文化形成のメカニズムとその內的構造の解明をおこなうことを意圖している。しかし、問題點は多岐に亘り、從來の諸研究が問題を一般化するあまりにややもすれば抽象的な議論に陷る傾向があるので、本研究では特定の時代・地域に關心を限定して具體的なコンテクストの設定のなかで班員のもつ知見をつきあわせてゆく方針を採っている。さしあたっては、インド世界の北西邊境の地カシミールで

成立した最古のヒンドゥー教文獻「ニーラマタ(Nīlamata)」を對象の中心に据え、關連諸文獻を廣範に參照しつつ、このテクストの檢討と分析の作業を進めつつある。十二月までに全體の約三分の一にあたる部分までの檢討を終えた。カシミール地域における古代ヒンドゥー教の諸特徴を多面的に探ることによって、地方的特徴と超地域的性格を併せもつヒンドゥー教文化の複合的性格とその形成のダイナミックスを明らかにすることが當面の目標である。

客員部門

明清時代の國家と社會　班長　岩見　宏　谷口規矩雄

研究發表によって會を進めているが、本年後半からは特に研究報告作成を念頭におき、題目をなるべく明末清初期に絞るよう班員各位に要請した。なお岩見宏は八六年度をもって退官したため、四月から谷口規矩雄が代って班長となった。

一月二〇日　隱元禪師日本渡來の事情——特に南明との關係について——　小野　和子

一月二七日　清末民初の吳錦堂——『續刻杜白兩湖全書』について——　森田　明

二月三日　廣東黃蕭養の亂　山根　幸夫

四月二八日　明末の流賊集團形成に關する覺書　吉尾　寛

五月一二日　明代後期の沿海航運　松浦　章

五月一九日　清代の地方經費と附加稅問題　岩井　茂樹

五月二六日　アヘン問題と「失察處分」　井上　裕正

六月二日　顧炎武官田論における「國家之所有」說の背景　森　正夫

六月九日　彭紹升の思想——乾隆期士大夫と佛教に關する一考察——　三浦　秀一

六月十六日　太平天國期廣西少數民族の抗租——永淳・橫州——　稻田　清一

六月二三日　宋代以降における宗族の特質の再檢討——仁井田陞の同族「共同體」論をめぐって　井上　徹

六月三〇日　華北における一條鞭法の展開　谷口規矩雄

九月二九日　明初城隍考　濱島　敦俊

一〇月六日　清代華北農村社會の一特徴——零細經營農民と清代民間宗教の傳播——　小田　則子

一〇月一三日　『南海沙頭盧氏族譜』について　松田　吉郎

一〇月二〇日　清初婁江開濬問題をめぐって　夫馬　進

一〇月二七日　新都の楊氏　森　紀子

一一月一〇日　張氏顧亭林先生年譜拾補　井上　進

一一月一七日　『萬曆會計錄』をめぐって　岩見　宏

一一月二四日　『留書』について　小野　和子

一二月一日　明末の朝鮮使節の見た北京　松浦　章

個人研究

東方部

中國音韻史の研究　尾崎雄二郎
殷周文物の考古學的研究　林　巳奈夫
中國の詩學　荒井　健
中國古代の醫學と思想　山田　慶兒
宋代の官僚制度　梅原　郁
六朝隋唐精神史　吉川　忠夫
隋唐社會史研究　礪波　護
五四時期における中國社會主義の研究　狹間　直樹
プレ＝イスラム期中央アジアの考古學　桑山　正進
中國中世土地所有の研究　勝村　哲也
六朝道教思想研究　麥谷　邦夫
古代中國における說話傳承の研究　小南　一郎
中國美術の造形と意味　曾布川　寛
中國建築の樣式・技法・空間　田中　淡
モンゴル帝國と中國社會　杉山　正明
東北作家の文學　村田　裕子
周代金文の研究　淺原　達郎
インドと中國における論理思想の展開　赤松　明彥
明清學術史の研究　井上　進
一九二〇年代における中國勞働運動　江田　憲治
對音資料による漢語音韻史研究　林　武實
明末清初士大夫思想研究　三浦　秀一
中國古代都市論　佐原　康夫
漢唐間における天文學と文化　新井　晉司
中國近現代教育史の研究　新保　敦子
中國の中世・近世繪畫　河野　道房

日本部

日本近代文化史の研究　飛鳥井雅道
日本ファシズムの研究　古屋　哲夫
植民地經濟の研究　山本　有造
廢藩置縣の研究　佐々木　克
文化史および文明史としての國民國家の形成　横山　俊夫
日本近世社會における政治權力　藤井　讓治
政治文化の中の社會理論　山室　信一
近代天皇制成立過程の研究　鈴木　祥二
日本帝國主義の經濟構造　杉本　俊宏
日本近代文學の研究　平田　由美
近代日本形成期における地域構造　奥村　弘

西洋部

ルソーの政治思想について　樋口　謹一
ボードレールの〝脱出〟について　多田道太郎
ドイツ宗教改革史　中村賢二郎
西洋論理思想史　山下　正男
社會的相互行爲の解讀　谷　泰
近代社會と家族　阪上　孝
フランス散文詩の研究　宇佐美　齊
シュメール行政・經濟文書の研究　前川　和也
インド世界の儀禮の研究　井狩　彌介
群衆現象の社會學　富永　茂樹
ヨーロッパ一二世紀の論理學と意味論　岩熊　幸男
社會構造の概念に關する社會哲學的考察　淺田　彰
西洋中世政治思想史　甚野　尚志
民族接觸と異文化の相互作用　細川　弘明
デカダンス研究　鈴木　啓司

東方部研究會

一月二八日　「王度『古鏡記』—太原王氏の傳承」　小南　一郎
「琮について」　林　巳奈夫
二月一八日　「後漢時代の天文學と政治制度について」　新井　晉司
「四十二章經について」　赤松　明彦
二月二五日　「彭紹升の萬物一體論について」　三浦　秀一
三月一一日　「萌芽期の東北文學」　村田　裕子
「宋代の形勢と官戶」　梅原　郁
五月一三日　「扁鵲傳說」　山田　慶兒
東方學報59冊書評
一二月二三日　吉川論文評　村田　裕子

事業概況

夏期講座　——文化接觸の諸相——

一九八七年八月　於　本館大會議室
一日　日本領事報告と中國市場　杉本　俊宏
一九世紀の視覺　—メアリイ・フレイザーの明治日本—　横山　俊夫
二日　タルカ・因明・ロゴス　—インド論理學はいかに翻譯されたか—　赤松　明彦
名醫の末期　—『三國志』華佗傳を讀む—　山田　慶兒
三日　デカダンスという言葉をめぐって　鈴木　啓司
「夕日」と文學　—フランス近代を中心に—　宇佐美　齊

開所記念公開講演會

一九八七年一一月五日　於　本館大會議室
顧炎武の學問とその生涯　井上　進
統計學と社會秩序　富永　茂樹
議會の開設　—明治二三年の精神狀況—　飛鳥井雅道

停年退官教授講演會

一九八七年三月一九日　午後三時　於　本館大會議室
同時代としての中國　竹内　實

一九八七年度漢籍擔當職員講習會

〔漢籍電算處理〕は、本學大型計算機センターの協力を得て一一月九日より同月一三日まで次の通り行なわれた。

九日　漢字のデーターベース（講演）　大型計算機センター教授　星野　聰
東洋學文獻類目の編纂とフォーマット（講義）　都築　澄子
コード系の諸問題（講義）　勝村　哲也
東洋學文獻類目の計算機處理（Ⅰ）　大型計算機センター技官　河野　典
一〇日　ALA文字と東南アジア言語處理（講義）　帝國女子短大助教授　桶谷猪久夫
漢字とJIS外字の處理（講義）　帝國女子短大助教授　桶谷猪久夫
東洋學文獻類目の計算機處理（Ⅱ）　大型計算機センター技官　村尾　義和

データベース検索（Ⅰ）（實習）
一一日　計算機入門（講義）　大型計算機センター助教授　島崎　眞昭
データベース検索（Ⅱ）（實習）
一二日　エキスパートシステムと情報検索（講義）　大型計算機センター助手　大西　淳
大學間・圖書館間ネットワーク（講義）　大型計算機センター講師　飯田　記子
學内ネットワーク（講義）　大型計算機センター助教授　金澤　正憲
データベース検索（Ⅲ）（實習）
一三日　附屬圖書館見學　大型計算機センター見學
東洋學文獻類目と漢籍目錄の電算化（講義）　勝村　哲也
質疑應答
一八日　集部書（講義）（實習）　礪波　護
一九日　附屬圖書館見學　荒井　健
最近に於ける中國の出版事情　KK東方書店大阪營業所長　竹部　瑩
二〇日　朝鮮本（講義）（實習）　目錄法（講義）（實習）　滋賀大學助教授　井波　陵一
二一日　質疑應答

一九八七年度漢籍擔當職員講習會

文部省と本所附屬東洋學文獻センターとの共催により、〔中級〕は、一一月一六日から同月二一日まで、次の通り行なわれた。

一一月一六日　中國の書物（講義）　尾崎雄二郎
經部書（講義）（實習）　吉川　忠夫
一一月一七日　史部書（講義）（實習）　梅原　郁
子部書（講義）（實習）

所員動靜

○竹内　實教授（東方部）は、停年退官（三月三一日付）京都大學名譽教授の稱號を授與。
○尾崎雄二郎教授（東方部）は、當研究所長に就任、附屬東洋學文獻センター長に併任（以上四月一日付）。
○谷口規矩雄大阪大學教養部教授は、併任教授に（東方部）。（比較文化研究部門、四月一日～一九八八年三月三一日）。
○井上輝夫慶應義塾大學經濟學部助教授は、非常勤講師（日本部）。（以上比較文化研究部門、八五年四月一日～八八年三月三一日）。
○天野史郎講師（西洋部）は、辭職（三月三一日付）、明治學院大學國際學部助教授に轉出。
○宮嵜法子助手（東方部）は、三重大學人文學部助教授に昇任（三月三一日付）。
○新保敦子氏を助手（附屬東洋學文獻センター）に採用。
○鈴木啓司氏を助手（西洋部）に採用（以上四月一日付）。
○井上章一助手（日本部）は、國際日本文化研究センター助教授に昇任（五月二一日付）。
○河野道房氏を助手（東方部）に採用（六月一日付）。
○赤松明彦助手（東方部）は、九州大學文學部助教授に昇任。
○山本有造助教授（日本部）は、教授に昇任（以上一一月一日付）。
○麥谷邦夫助教授（東方部）は、二月一六日伊丹發、中國社會科學院世界宗教研究所、四川大學宗教研究所、武當山道教協會、湖南省中醫學院等で、三教交渉の思想史的研究を終え、一二月一四日歸國。
○山田慶兒教授（東方部）は、文部省科學研究費補助金（海外學術調査）により、二月二七日伊丹發、中國社會科學院日本研究所、北京大學、吉林大學、南開大學等で中國地域における日本研究情報の流通に關する調査を終え、三月一〇日歸國。
○林　巳奈夫教授（東方部）は、四月五日伊丹發、臺灣國立故宮博物院で中國古代玉器の研究を終え、同月一二日歸國。
○淺田　彰助手（西洋部）は、四月八日成田發、マサチューセッツ工科大學でアジア學會及びポストモダニズム・ワークショップに參加し、シカゴ大學、コーネル大學で資料收集を終え同月二二日歸國。
○田中　淡助教授（東方部）は、文部省科學研究費補助金（海外學術調査）により、四月二八日成田發、邯鄲市立文物研究所、北魏洛陽城、鄭州等で日本と中國における都市の比較史的調査を終え、五月二八日歸國。

○小南一郎助教授（東方部）は、五月四日伊丹發、中國社會科學院文學研究所、四川大學歷史系、山東大學中文系等で中國古典小說と民間文藝の關係について研究を終え、一二月一日歸國。

○吉川忠夫教授（東方部）は、五月一八日伊丹發、北京大學歷史系、湖北省社會科學院等で六朝時代の政治と文化における地域社會の役割についての研究を終え、六月八日歸國。

○多田道太郎教授（西洋部）は、六月九日伊丹發、プラハ、ブタペスト、フランクフルト、ロンドン市內各地で世界の歷史都市の現狀と課題に關する調査・研究を終え、同月二四日歸國。

○谷　泰教授（西洋部）は、文部省科學研究費補助金（海外學術調査）により六月一五日伊丹發、スリナガル、ファルガム周邊等でインド亞大陸における雜穀栽培とそれをめぐる農牧複合の研究調査を終え、九月一五日歸國。

○前川和也助教授（西洋部）は、六月二九日伊丹發、オランダ近東研究所でシュメール農業研究グループ研究集會に參加し、ロンドン大英博物館でシュメール農業に關する研究調査、イスタンブール考古博物館で楔形文書の研究を終え、八月二八日歸國。

○乗山正進教授（東方部）は、七月一日成田發、イタリア中東極東研究所の招請により、ベネツィアで開催された「西歐における第九回南アジア考古學會」にて研究發表ののち、ローマの國立東洋美術館でガンダーラ彫刻の資料收集を終え、同月一五日歸國。

○村田裕子助手（東方部）は、七月一八日伊丹發、黑龍江大學、吉林大學等で東北陷落期文學に關する資料收集を終え、八月五日歸國。

○井狩彌介助教授（西洋部）は、文部省科學研究費補助金（海外學術調査）により、八月一二日成田發、カトマンズ市內各所でヒンドゥー寺院儀禮調査、スリナガル、カングラ、ガヤー等でガンジス河流域の複合文化形成動因の比較研究を終え、一〇月一四日歸國。

○山室信一助教授（日本部）は、八月一七日成田發、ハーバードイェンチン研究所で客員研究員として比較日米政治思想史研究をし、一九八八年八月一九日歸國豫定。

○乗山正進教授（東方部）は、一〇月一九日成田發、パキスタンのシンド州における佛教・イスラーム教遺跡及び遺物の調査、ハイルプル大學、ペシャーワル大學にて遺物調査ののち、アフガニスタン科學アカデミークシャン研究國際センターの招請によりカーブルにて開催された「クシャーン時代における文化・思想に關する第六回國際セミナー」にて研究發表・議長を行い、一一月二七日歸國。

○田中　淡助教授（東方部）は、一〇月二〇日伊丹發、杭州の靈隱寺他各所、蘇州の環秀山莊他各所で古建築及び庭園調査、南京工學院建築系創立六〇周年記念大會に出席し、同月三〇日歸國。

○梅原　郁教授（東方部）は、一一月二三日伊丹發、泉州市貿易局開設九〇〇周年記念シンポジウムに出席し、天妃碑、宋慈墓、龍泉窯等各所で史跡の調査を終え、一二月五日歸國。

○細川弘明助手（西洋部）は、一二月五日成田發、オーストラリア國立大學太平洋地域研究所でオーストラリア北西海岸地方の言語社會學的研究をし、一九八八年三月七日歸國豫定。

○目塚茂樹名譽教授（八二才）は、二月九日逝去。

外國人研究員（比較社會客員部門）

王　學　莊
中國社會科學院近代史研究所副研究員
中國國民革命の研究
受入教官　狹間　教授
期　間　一月一七日～六月三〇日

Anne-Marie Christin　パリ第七大學教授
テクストとイマージュの相關關係の研究
受入教官　宇佐美助教授
期　間　七月一五日～一九八八年一月一四日

外國人研究員（日本學客員部門）

潘　吉　星　中國科學院自然科學史研究所教授
日中科學交流史の研究
受入教官　山田　教授
期　間　五月一五日～一二月二〇日

○本學招聘外國人學者受入れ要項により、本研究所において共同研究に參加する外國人學者は次のとおりである。

Gavan McCormack
ラ・トローブ大學歷史學部助教授
一九三〇年代の日本政治史の研究
受入教官　古屋教授
期　間　一月二六日～六月三〇日

夏　剛　中國社會科學院外國文學研究所助理研究員
日本の戰後文學と文革後の中國文學の比較研究
受入教官　荒井教授
期　間　六月三〇日～一九八八年六月二九日

外國人共同研究者

Reinhard H. Emmerich　ハンブルク大學研究員
漢代文化の研究
受入教官　林　教授
期　間　五月一日～五月三一日

○本學研修員規程により、本研究所において研修する外國人研修員とその題目は次のとおりである。

Magnus Kriegeskorte　ボン大學院生
近代日中交渉史　指導教官　狹間　教授
期　間　四月一日～一九八八年三月三一日

Evelyne Mesnil　パリ第七大學院生
蜀國宗教繪畫の研究　指導教官　荒井　教授
期　間　四月一日～一九八八年三月三一日

Marguerite Wells　オックスフォード大學院生
新劇における笑い　指導教官　横山助教授
期　間　九月二四日～一九八八年九月二三日

Richard Piorunski　フランス國立東洋言語文明研究所博士課程
新情報システムの社會受容にかかわる社會・文化的背景　指導教官　谷　教授
期　間　一〇月一日～一九八八年九月三〇日

Sylke U. Schermann　ハイデルベルグ大學院生
淮水流域の文化發展と春秋時代の諸地域文化相互の交流關係　指導教官　林　教授
期　間　一〇月一日～一九八八年九月三〇日

出版物

紀　要

東方學報　第五九號（紀要第一〇三號）
一九八七年三月三一日刊

人文學報　第六一號（紀要第一〇四號）
一九八七年三月三一日刊

人文學報　第六二號（紀要第一〇五號）
一九八七年一〇月三〇日刊

ZINBUN（歐文紀要）第二一號
一九八七年三月三一日刊

研究報告その他

東洋學文獻類目　一九八四年度　附屬東洋學文獻センター編
一九八七年三月三一日刊

東洋學文獻類目一九八三年度　著者索引補訂版
一九八七年三月三一日刊

中國貴族制社會の研究　川勝　義雄　礪波　護編
社會的相互行爲の研究　谷　泰編
一九八七年三月三一日刊

DOMESTICATED PLANTS AND ANIMALS OF THE SOUSTHWEST EURASIAN AGRO-PASTORAL CULTURE COMPLEX
I CEREALS
Edited by SADAO SAKAMOTO
II PASTORALISM
Edited by YUTAKA TANI
一九八七年三月三一日刊

五四運動の研究　島田虔次　小野信爾　竹内弘行
一九八七年一〇月三〇日（同朋舍）刊

所報「人文」第三三號
一九八七年三月三一日刊